リスペクト

R・E・S・P・E・C・T

この物語は、二〇一三年にロンドン東部で始動したＦＯＣＵＳＥ15運動と、同運動が二〇一四年に行ったカーペンターズ公営住宅地の空き家占拠・解放活動に着想を得たフィクションであり、小説であります。

著者におおいなるインスピレーションを与えてくれた若きシングルマザーたち、そしてこの反ジェントリフィケーション*運動の関係者たちに感謝を捧げつつ、いまだ彼女たちがしたことについて知らない日本の読者たちに本書をぶち投げます。

＊ジェントリフィケーション（gentrification）

都市において、低所得の人々が住んでいた地域が再開発され、お洒落で小ぎれいな町に生まれ変わること。「都市の高級化」とも呼ばれ、住宅価格や家賃の高騰を招き、もとから住んでいた貧しい人々の追い出しに繋がる。

労働者の女性たちの生活は厳し過ぎ、教育をほとんど受けていないので、投票権を勝ち取る運動で影響力ある声にはならないと言う人々がいます。そうした人々は歴史を忘れてしまったのです。

――――シルビア・パンクハースト

★ジェイド
グループのリーダー的存在の若いシングルマザーの白人女性。おとなしい性格だったが、若年層ホームレスのホステル（ザ・サンクチュアリ）から退去せよという通知を受け、歩道でいきなりアピールを始める。同じホステルのシングルマザーたちと共に、E15ロージズという運動グループを始動。出産前は保育士の仕事をしていた。

★ギャビー
ジェイドたちと共に立ち上がる若いシングルマザー。ラッパー風ファッションの黒人女性で、アクロバティックなダンスと子どもたちの世話が得意。パワフルでタフだが、情に厚い。ジェイドやシンディと共に悩みながら闘っていく。

★シンディ
ジェイドたちと共に立ち上がる若いシングルマザー。フィリピン系移民の母親を持つ。元ネイルアーティストで爪には赤の薔薇を描いている。鮮やかな口紅が印象的な小柄でおしゃれな女性。ジェイドたちを優しく気づかう。

★ローズ
E15ロージズのシングルマザーたちの運動を背後からがっちり支える、ゴシック・パンク風の初老の女性。革ジャンが似合い、眼光鋭い目と苦み走った表情で、昔は泣く子も黙る運動家としてならした。ブルース・ウィリスに似ている。二の腕に、薔薇と食パンのタトゥーをしている。ジェイドたちに運動のやり方を伝え、プロテストソング「パンと薔薇」を歌い励ます。

★史奈子
日本の大手新聞社のロンドン駐在員事務所に勤務する二十代の新聞記者。バーバリーのトレンチコートを着て、セミロングの髪をポニーテールに結び、取材を行う。E15ロージズの占拠運動に対して「不法行為」と批判的だったが、現場の人々の相互扶助のスピリットに出会う。

★幸太
東京から来た若いアナキスト。史奈子の元恋人。E15ロージズの占拠現場が見たくて政治・思想誌『標榜』の取材のために渡英。イエス・キリストか又吉直樹か、みたいな髪型で、いつも黒ずくめ。妙に人なつこく、緩い性格で、英語が喋れなくてもずんずん現地の人々に入り込んでいく。

★ナイラ
ローズの昔の運動仲間の女性。福祉専門の大学教員。再開発の問題についてE15ロージズにレクチャーするなど支援する。パキスタン系で、小柄。黒髪をおさげにして丸い大きな黒縁の眼鏡をかけている。ジミ・ヘンドリックスのTシャツの上に別珍のブレザーを着て、ジーンズを穿いた姿は少年のようにも見える。

★ロブ
貸し切りバスのレンタル会社を経営する。ローズとナイラの昔の運動仲間。E15ロージズをローズたちと共に全面的に支援する。若い頃はガリガリに痩せて目つきが鋭く、その黒ずくめの姿は、ヴィニー・ジョーンズを髣髴とさせるハードボイルドなアナキストだった。が、今は人の好さそうな中小企業の社長。

★ウィンストン
公営住宅の占拠地で、バスルームやトイレの水回りの修繕法をレクチャーする、年配の配管工。カラフルなニット帽をかぶったラスタマンで、幸太と意気投合。

★ラッセル・シャープ
コメディアン。ジェイドにインタビューしたり、占拠地にカメラクルーを連れてきたりして、E15ロージズの運動を世に広げる。長髪に革ジャンで、お笑いの人というよりロックミュージシャンのように見える。左派系の高級紙に連載コラムを持つ。

そして、本作のラスボス

★シルビア・パンクハースト（1882～1960年）
イギリスの婦人参政権活動家（サフラジェット）。1914年にイースト・ロンドン・フェデレーション・オブ・ザ・サフラジェットを設立。ロンドン東部の貧困者や労働者を支援し、戦争に反対した伝説のアクティヴィスト。

装丁　岩瀬聡
装画　NAKAKI PANTZ

序章

オープニング・スピーチ

「みなさん、あたしたちはロンドンから追い出されようとしています。
マンチェスターへ、バーミンガムへ、リーズへ、家族も友人もいない遠い場所に移住させられようとしているのです。
家賃を払えるはずもないのに、民間の賃貸住宅に引っ越せとアドバイスする福祉職員もいます。ロンドンの家賃は高過ぎて、とても庶民には部屋を借りられないことは、この街に住んだことのある人なら誰でも知っているでしょう。
あたしたちは「ザ・サンクチュアリ」というホステルに住んでいたシングルマザーです。そのホームレス用ホステルには約二百の部屋があり、二十七人の子どもを持つ母親たちも住んでいました。ところが、昨年の夏、あたしたちは突然に退去要求の手紙を受け取ったのです。二カ月のうちに出て行けと書いてありました。
あたしたちにはそれぞれ違う事情があり、様々な理由でそこに住んでいました。DVから逃げてきた人たち、養護施設や里親の家から出て来たばかりで赤ん坊を産んだ母親たち、実際に路上生活をしていた人たち。あたしも貧乏な労働者階級の家に生まれ、十代で子どもを産んで生活に困ってホームレスになり、ホステルに住むようになりました。
あたしは社会運動家でも労働組合員でもありません。ただの二十歳の母親です。一年前には、自分がこんなところでスピーチする日が来るなんて想像もできませんでした。前のあたしはとてもシャイで、誰かに自分の考えを言うことをいつも怖がっていた。権力を持っている人々、ああしろ、こうしろとあなたに命じる人々は、あなた自身をとても小さな存在に感じさせ、

「そんなことを言うとひどい目にあいますよ」と脅して何も言えない人間にしてしまうからです。

だけど、あの通知を受け取った日、あたしは気づきました。いつもビクビクして黙っていると、あたしやあたしの赤ん坊のような人間は存在しないものにされてしまう。おとなしくしているからいいんだと思って、どんどん生きるために必要なものを取り上げられてしまう。

そもそも政府や自治体が権力を持っているのは、人々のためにその力を使うためです。それを使って人を脅したり、人々から何かを取り上げるためじゃない。権力を持っている人々は本来の自分の仕事をすべきです。すべての住民が屋根のある場所に住めるように、手頃な家賃の住宅を提供すべきなのです。ロンドンに必要なのは、ソーシャル・クレンジング（地域社会の浄化）ではなく、ソーシャル・ハウジング（公営住宅制度）なのです。人には等しく居住の権利があるのですから。

最後になりましたが、大切なお知らせがあります。

住む家をなくしたあたしたちは無人の空き家を占拠しました。自治体の不手際で住む人もいないまま放置されていた公営住宅地の建物です。国も自治体もあたしたちの権利を保障しないのなら、あたしたちが自分で自分の権利を行使します。R（アール）・E（イー）・S（エス）・P（ピー）・E（イー）・C（シー）・T（ティー）！　あたしたちが求めているのは少しばかりのリスペクトなのです」

史奈子は自宅の居間のソファに座ってその映像を見ていた。

赤い煉瓦の壁の典型的な二階建ての公営住宅の前に、その若い女性はマイクを握って立っている。彼女の左脇にはジャージの上下にキャップを被って大きなサークル状の金のイヤリングをつけた、ラッパーみたいな黒人女性。右脇には、真っ赤のセーターにスキニージーンズを穿き、セーターと同色の鮮やかな赤い口紅をつけたアジア系の女性が立っていた。

三人の若い女性たちから少し離れたところには、淡いピンク色に染めた髪を逆立て、鋲がたくさんついた革のベストを着た、ゴシックパンク風の初老の女性があぐらをかいて地べたに座っている。周囲にいる人々に比べると、真ん中でスピーチしているふくよかな女性はぐっと地味、というか、そこらへんのスーパーマーケットでよく見かける英国人の若い母親という感じの外見だ。でも、スピーチの口調は淀みなく、場慣れしている感じだった。彼女の言葉に「イエーイ」と声を上げたり、口笛を鳴らしたりしているのは、史奈子が日常的に接している英国人とは全く違うタイプの人々だった。小汚い、というか、いなたい。史奈子がイメージとして知っている（または時々、取材でタクシー移動するときに窓から遠目に見る）公営住宅地系ファッションの人たちだ。

どうしてあの人たちは寝るときも起きているときも同じという感じの格好をしているのだろう、と史奈子は思った。霜降りグレーのスウェットの上下とかジャージとか、あまりにも画一的だ。外に出て働いていないと人間はああなってしまうのだろうか。そういえば、英国のキャメロン首相は、ああいう人々で構成された社会階層のことを「ブロークン・ブリテン」と呼び、壊れた英国を修復すると言って人気を集め、選挙に勝ったのだった。

眉間に皺を寄せてそのようなことをつらつら考えながら、史奈子はぶしゅっとビールの缶を開けた。そしてティーテーブルの上からスマホを取り、日本からのメッセージをもう一度見た。

「うっひょーー!!　ロンドンですげえことが起きてるじゃん。トーキョー・アナキストの♥も彼女たちとともに。ファック・ジェントリフィケーション！　闘う母ちゃんたち最高！」

どうやら幸太が書いてきたのは、この公営住宅占拠事件のことだったらしい。久しぶりに連絡が来たかと思ったら、何が「ファック・ジェントリフィケーション」だ。そんなことよりファック・ユーだ。

史奈子は黒縁の眼鏡を手で押し上げ、返事をタイプした。

「いまテレビで見たよ。このニュースがアナキストと関係あるとは思わなかったけど」

そのままスマホをテーブルの上に置いてソファから立ち上がろうとすると、秒速で着信音が鳴った。

「あるもなにも、これこそアナキズム。直接行動、すげー!!　血がたぎるう。俺もロンドンに行っちゃうかも」

は？

史奈子はスマホを見て、前髪をかき上げながらソファに座り直した。ロンドンに行っちゃうかも？　一年前に別れた恋人にこんなことをあっさり言える人間の気が知れなかったが、こういうことをつるっと言えるところがいかにも幸太だ。単純に面白そうなことが起きているから見に行きたいという、きわめてシンプルな欲望に突き動かされているのである。そういう人間

なのだ。だからこそ、史奈子は彼と別れた。なぜなら、史奈子はそういう人間じゃないから。

だいたい、いま日本は朝方の五時ぐらいのはずだが、すぐにメッセージが返って来たということは、彼は起きている。たぶん、例によってまた新宿かどこかで飲んでいるのだろう。泥酔してこういう軽々しいメッセージを打ってきているとすれば、本気にして動揺するのはバカらしい。

「来るな」

と、いっぺんタイプした言葉を、史奈子は削除した。

いくらなんでも非社交的だからだ。社交。そう社交である。もう恋人でもないし、一緒に住んでいるわけでもないのだから、彼と私がいま行っているのは単なる社交。人と人とのおつきあい。だったらいろいろ考えず、適当にふつうの社交辞令を書いて戻せばいいのだ。

「いい季節だよ。まだ寒くないし、ビールがうまい」

史奈子はそうタイプして、メッセージを読み直した。なかなかニュートラルな響きでいいんじゃないかと思った。来たら、とも言ってないし、来るな、とも言ってない。こちらの気候状況について述べているだけで、私的な要望や呼びかけはいっさい含まれていない。一見フレンドリーだが、そこはかとない距離感も感じられる。社交的距離（ソーシャル・ディスタンス）。やっぱ大人はこれでしょ、これ。

史奈子は満足そうにきゅっと口角をあげて微笑み、幸太にメッセージを送った。

思い返してみれば、半年ほど前に彼から連絡が来たときには、家賃が払えなくなってアパー

トを追い出されたので、アナキスト仲間がやっている古本屋の倉庫で寝ていると言っていた。またいくらか送金してほしかったのかなと思ったが、史奈子は「大変だね、がんばって」と返信した。そしたら先方は「うん。大変、すごく」としつこく書いてきた。「大丈夫、日はまた昇る」と打ち返したら、「昇るかな。。。すごく大変だけど」と甘えモードに入ったので、ここいらで破壊力ある返信をと思い、「昇らないものを昇らせるのがアナキストでしょ。既成概念を打ち壊せ」と嫌味を書いた。いま思えばちょっと意地が悪かったかもしれないが、それが功を奏して、ぷっつり彼からの連絡は途絶えていたのだ。

とは言え、よく考えてみればそれほど金銭に窮している幸太がロンドンに来るなんてあり得ない。家賃を払えない人間に海外渡航費用がつくれるわけがない。どうもあいつが絡んでくると調子が狂ってしまうけど、冷静に考えるとアホくさくなってくる。結局、それがわかるまでに五年もかかってしまったのだったが、もう貧乏アナキストに足を引っ張られたりしない。そのために私はロンドン駐在の辞令を受けたのだから。

二十代にして日本の高級紙から派遣された英国駐在記者。それはこれまでの自分の頑張りの成果だ。私はいま、こうしてテムズ川を見下ろす高層フラットのベランダに立ち、優雅にビールを飲みながら、ロンドンの美しい夜景を見下ろしている。このクールで快適なライフスタイルに、幸太のような男の居場所はない。

そう考えながら、史奈子は満足げに微笑んでいた。インディアンサマーの熱を帯びた生ぬるい秋風が頬を吹き抜けていく。史奈子は頬にひんやりしたビールの缶をあてて瞳を閉じた。

すべて良好。変なやつさえいなければすべてうまくいく。
そのとき、居間のテーブルの上に置き去りにされたスマホがピロロロロという着信音と共に妖しい光を放っているのを史奈子は知る由もなかった。
スクリーンの中央には新着メッセージが映し出されている。
「マジかーーーー！　おう、行くぜ、俺もパイントでビール飲みに!!」

第一章

それはオリンピックの翌年に始まった

ジェイドの覚醒

二〇一三年八月のある暑い日、三人の若い母親たちがロンドンのホームレス専門ホステルの一室に座っていた。

「出て行けって言ったって、どこに行けばいいんだよ？　そもそもあたしら行き場がないからここにいるんだろ」

頭部の左右を剃りあげ、中央部に残ったドレッドロックの髪を頭頂部でポニーテールに結んだギャビーが、ジャマイカ訛りのコックニー英語で毒づいていた。

「ファッキン・オリンピックパークのせいだ。ぜんぶオリンピックが悪いんだよ。クソみたいなファッキン再開発計画なんて進めやがるから」

彼女たちは、ホステルの持ち主である住宅協会から退去通知を受け取ったばかりだった。地方自治体が福祉予算削減の一環としてこのホステルへの拠出を削減すると決定したので、十月半ばまでに出て行けというのである。

郵便番号が「E15」のロンドン東部の地区は、もともとは廃棄物処理場や倉庫が立ち並ぶ、さびれた地域だった。が、二〇一二年のロンドン五輪で、選手村やスタジアムなどの競技場を一か所に集めるオリンピックパーク用地として選ばれ、それを契機に大がかりな再開発が進め

られた。古い商店街や住宅地は次々と取り壊され、高級マンションやモダンなオフィスビル、巨大なショッピングセンターなどができて、一大ニュータウンとして生まれ変わったのだった。

だが、その美しく整然とした街にも、まだ昔ながらの建物がところどころに残る区画があった。十階建てのホームレス専門ホステル、ザ・サンクチュアリもそんな区画に立っていた。

「こういうの、ソーシャル・クレンジングっていうんだって」

フィリピン系移民のシンディが長い黒髪を掻き上げながら言った。ネイルアーティストをしていた彼女の爪には赤い薔薇が描かれている。

「何それ？　エスニック・クレンジングっていうのは聞いたことあるけど」

ジェイドが尋ねると、シンディは答えた。

「同じようなもんだよ。人種の違う人じゃなくて、貧乏人を街から追い出して地域社会を浄化するっていう意味なんだって」

三人が座っているのはホステルの一階にある子ども用プレイルームだった。屋内用の小さなすべり台やソフト積み木、小さなお城の形をしたトランポリンなどが並んでいる。ホステルの各人の部屋はとても狭く、子どもが遊べるようなスペースはないので、子持ちの母親たちはみんなここに降りてくる。

「だいたいさ、なんで区はいきなり予算削減なんてすることになったの？」

母乳を吸っている娘が自分の赤毛の長い髪を手で弄(もてあそ)んでいるのを見ながらジェイドが言った。

「新聞で読んだけど、政府が始めた緊縮って政策のせいらしいよ」

ギャビーが答えると、シンディも言った。
「うん。そうみたい。その緊縮ってやつのせいで、政府が生活保護受給者を締め付けにかかってるんだ。特にあたしらみたいなシングルマザーが標的にされているらしい」
「行政はもうお金を出さないから、自分たちで何とかしろって言い出したんだ」
自分たちで何とかならないからホステルにいるのに、どうしろっていうんだろう……。
ジェイドはため息をついた。でも、何とかしなくてはいけない。赤ん坊を連れて路上に出るわけにはいかないからだ。
ジェイドは数日前に福祉事務所に相談に行ったときのことを思い出した。住居のことは区役所の住宅課で相談しろと言われたので行ってみると、区内の他のホステルにも公営住宅にも空きはないから、民間の賃貸住宅を借りるしかないだろうと言われた。
そんなことを言われても、民間の賃貸住宅など家賃が高すぎて借りられるわけがない。でも、ギャビーやシンディと一緒に一軒のフラットをシェアすればどうにかなるかもしれないと思い立ち、手分けしてめぼしい物件に片っ端から電話もしてみた。すると、先方は必ずこう言うのだった。
「賃貸手続きには職場からの在籍証明書が必要になります」
ホームレスのジェイドたちには職場なんてない。だから、
「生活保護を受給しています」
と答えると大家も不動産業者も口をそろえて言った。

「申し訳ありませんが、生活保護受給者の方々とはお取引しておりません」
そんなわけで、まる二日間、三人は電話をかけまくったが、とうとう一軒も物件を見に行くことはできなかった。生活保護受給者が民間の住宅を賃貸することの難しさを住宅課の職員は知っているのだろうか？　知っていて「民間の賃貸しかないですね」などと言っているのだとすれば、じゃあ路上に寝なさいと言っているのと同じことだ。
「行き先、見つかった？」
エレベーターでプレイルームに降りてきた別の母親たちがジェイドたちに聞いてきた。この言葉は、ここに住む母親たちが顔を合わせるときの挨拶みたいになっている。ジェイドたちが首を振ると、頭にヒジャブを被った小柄な母親が言った。
「今日、福祉課と住宅課に相談に言ったら、バーミンガムのフラットを紹介されちゃった」
「え？」とギャビーが声を上げる。
「中北部に行きなさいって言うの。バーミンガムなら安いフラットがあるから、住宅補助金でなんとか賄えますよって」
「嘘でしょ……、バーミンガムなんて、そんな遠いとこ」
ギャビーが呆れたように首を振ると、ドレッドの髪についたビーズがじゃらじゃら鳴った。
「それで、何て答えたの？　まさか行くなんて言ってないよね？」
ジェイドが尋ねるとヒジャブを被った母親が答えた。
「即答はしなかったけど、考えますって言ったの。だって、そこしかないんだったら、行くし

かないじゃない……」
「ダメだよ、イエスなんて言ったら！　うっかり一人でもイエスって言ったら、みんなそうさせられちゃうから」
　ギャビーが拳を握りながらそう言い、ジェイドとシンディも頷いた。住宅課の職員たちの対応は新たな局面に入ったようだった。ロンドンにはもう住めないことを母親たちに実感させ、諦めさせた後で、家賃の安いイングランド北部や中部に引っ越しさせようとしているのだ。
　その証拠に、三人でバギーを押しながら再び区役所に相談に行ってみると、ジェイドとギャビーとシンディもまったく同じことを言われた。ジェイドはリーズ、ギャビーはマンチェスター、シンディはヨークの賃貸住宅を斡旋されそうになったのだ。
「冗談じゃない！　家族も友人もいない北部にシングルマザーが一人で行って子どもを育てろなんて、どんだけ大変かわかってんの？」
　ギャビーが椅子から立ち上がって食ってかかると、毛玉だらけの紺色のフリースを着た中年の窓口の男性職員が言った。
「お、落ち着いてください」
「あんたたち、ロンドンには家が不足しているっていつも言うけど、このあたり、空き家だらけじゃんか。投資家が買って貯金箱がわりにしてるからだよ。買ったやつらは値が上がったら転売するつもりだから、人が住んでようがどうしようが知ったこっちゃない。空き家はゴロゴロあるのに、地元の人間が住める家がないなんて、どう考えてもおかしいだろ」

ギャビーは新聞をよく読んでいた。「そうでちゅねー」「おりこうさんでしゅねー」とか言って子どもの相手ばかりしていると、大人の会話が恋しくなる。でも話をする相手がいないので、ホステルの一階に置かれている無料配布の地方紙や社会活動家たちが作ったリーフレットを部屋に持ち帰って貪るように読むのだった。だから、ギャビーはこの地域の住宅問題には詳しかった。

「不動産業者と投資家はここをファッキン・ミドルクラスの街にしようとしている。区も住宅協会もその片棒をかついでる。ファック・ジェントリフィケーション！」

ギャビーがFワードを放つと、紺色のフリースの職員が机上のブザーを押した。数名の男性職員が中からぞろぞろ出て来た。スーツ姿の上司らしい中年男性が近づいてきて叫んだ。

「職員に対する虐待的な言動を許すわけにはいきません」

「虐待的だって？　ホームレスをシェルターから追い出すのはファッキン虐待じゃないのかよ。子連れの若い母親に北部に行けっていうのはファッキン虐待じゃないのかよ？」

「大声を出すのはやめてください。職員へのリスペクトを示してください」

まるで汚らしいものでも見るような目つきで顔をしかめ、スーツ姿の男性が吐き捨てるように言った。

「我々は公僕ですが、そのようなリスペクトに欠ける態度は許容しません」

リスペクト。

ギャビーの子どもを抱いて後方に立っていたジェイドの頭に、その言葉がこびりついた。

あたしたちはいつもこの言葉を言われてきた。生活保護を貰っていて、福祉課や政府や納税者の世話になっている人間は、もっと社会へのリスペクトを示せと。ホステルの部屋の天井にカビが生えていても、フローリングがあちこち剝げた床はヨチヨチ歩きの子どもを育てるには危険でも、セントラルヒーティングの調子が悪くて冬はコートを着て寝ていたとしても、不平を言ってはいけない。そんな態度はわがままで、リスペクトが足りないと。

だけどジェイドはリーズには行きたくなかった。

もし、実家にそこそこお金があり、年金で食べて行ける身分の親がいて、昼間にジェイドの赤ん坊を預かることができたら、こんなことにはならなかっただろう。ジェイドは再び保育士として働けるし、自分で安い部屋を借りて、子どもと二人、貧しくても暮らしてゆける……、と思ったところでジェイドの思考は止まった。たかが千百ポンド（一ポンド百六十円換算で約十七万六千円）ぐらいの保育士の月給で、どんなにぼろっちくて狭くても家賃が千ポンドは下らないロンドン東部の部屋を借りて生活していけるわけがないからだ。

つまり、あたしのような人間は、仕事をしていようがどうしようが、生まれ育った街ではもう暮らしていけないのだ。

ジェイドは覚醒に打たれていた。

「リスペクトしろ」とこの人たちは言う。でもそれって、要するに「黙れ」という言葉の言い換えなんじゃないのか。どう考えてもおかしいことや、理屈に合わないことに気づいても、身分をわきまえて沈黙していろということなんじゃないのか。

ギャビーが警備員に両脇から挟まれて外に連れて行かれようとしていた。シンディも待合所の椅子から立ち上がり、バギーを押して後を追う。右の腕にギャビーの赤ん坊を抱え、左手で自分の子どもが乗ったバギーを押しながらジェイドもその後を追った。が、何歩か進んだところで、ジェイドは勇気を出して振り返り、職員たちに言った。

「これがあなたたちの、住民に対するリスペクトですか」

窓口の職員たちは、ふふ、と薄笑いを浮かべたり、肩をすくめたりしている。

人を笑っているあなたたち。

あなたたちのその顔をあたしは絶対に忘れない。

ジェイドは踵(きびす)を返して役所の出口に向かって歩き始めた。

あたしはもう黙らない。あたしはもう黙らない。あたしはもう黙らない。

同じ言葉を自分の血管に叩き込むように頭の中で繰り返しながら。

腹から出せ、ギリギリの声を

「ここでやんの？　本当に？」

長い黒髪を指で弄びながら、シンディが不安そうな声を出している。

「そう、ここでやるの」